

2018/01/14 先週のメッセージより

「あなたは良き者」

■あなたの真実な姿

あなたは自分自身をどのような者と捉えていますか。これは、あなたの選択を左右する大切な基本です。

実は、人の捉え方は、ダメな者か良き者かの二択しかありません。そして、大半の人は、人間はダメな者だと思っています。だから、自分が失敗したり悪いことをしたりすると、自分が悪かった罰だなどと思うのです。お互いにダメな者だと思っているから、失敗した人を責めるのです。

しかし、私達を造った神様は、人は良き者だと言われます。いったいどちらが正しいのでしょうか。

今から 2000 年前の人々に、自動車や飛行機を見せても、その真実な姿を理解することはできないでしょう。しかし、私達にはわかります。それは、私達がそれを造ったからです。

「醜いあひるの子」という童話は、本当の自分の姿に気づかず、長い間苦しんできた白鳥のお話です。彼は、真実に気づくまでに、なんと苦しまなくても良いことに苦しんできたことでしょうか。自分はダメな者だと思い続け、死にたいとまで思い詰めたのです。自分をダメな者だと捉えると、間違った選択をしてしまうのです。

■人は良き者として造られた

私達の真実な姿を知っているのは、私達を造った神様だけです。その方は次のように言っておられます。

「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。」

(創世記 1:31)

「神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」(創世記 1:26-27)

「神である主は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世記 2:7)

神様は、人間を「非常に良い」者として造られました。神は良い方であり、良いものしか造ることができません。しかも人は神に似せて造られ、人の魂は神のいのちで造られています。人は、どう理解しても良き者でしかあり得ません。

私達は、神の子として造られました。人を愛し、神を愛するという神の本質が、私達の中にはあります。神様は、私達を良いことしかできないように造られたと記されています。

「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」(エペソ 2:10)

ところが、人は、自分を良き者とは思っていません。なぜなら、悪い自分を知っているからです。しかし、神のことばは真実ですから、私達は良き者なのです。問題は、なぜ良き者なのに悪いことをしてしまうのかということです。

■なぜ人は悪いことをするのか

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」(ヘブル 2:14-15)

イエス様が私達の罪を背負って十字架に架かったのは、死の恐怖の奴隷から、私達を解放するためです。良き者であるのに、悪いことをしてしまうのは、私達が生まれながらに死の恐怖の奴隷となってしまったからです。

「死」とは、神との結びつきを失った状態のことです。アダムとエバが、罪によって死ぬものとなったその時から、愛されていることがわからない不安と、やがて滅びるという恐れが、人に生じました。これが、聖書が教える「死の恐怖」です。これらの不安におびえて生きることが、死の恐怖の奴隷なのです。

「死」を私達に持ち込んだのは、悪魔です。悪魔が、アダムとエバを欺いて罪を犯させ、人間に死が入り込み、その結果、人は、神の愛が見えない不安と肉体の死が訪れるかもしれないという不安に、恐れを抱くようになりました。そうして、その恐れを回避するために、見えるもので安心を得ようとするようになったのです。これが肉の思いであり、罪です。ここから、人の悪は生まれます。

つまり、私達が悪いことをするようになってしまったのは、ダメな者だからなのではなく、死の恐怖に支配されているため、見えるものにしがみつくしかない状態になってしまったからなのです。

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」（I コリント 15:56）

ここでの「罪」は、ギリシャ語では単数形が使われており、個々の悪事等を指しているではありません。神との結びつきを失うという死によって生じた罪の状態のことです。では、罪に対してイエス様はどのように対応しておられるのでしょうか。

■イエス様の罪への対応

「イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。」」（マタイ 9:12）

イエス様は、罪を犯している私達のことを病人と呼び、ご自身のことを、私達をいやすために来た医者であると言っておられます。イエス様にとって、罪は私達の本質ではなく、外部から入り込んだ病気です。

ギリシャ語の「救い」という言葉の本来の意味は、「いやす」という意味です。本来良き者である私達が、罪を犯してしまうのは、死の恐怖のせいであり、それは、後からかかってしまった病気です。私達が悪いことをしてしまうのは病気のせいだから、病気を治すことが先決だとイエス様は言われます。

「だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけます。しかし、聖霊に逆らう冒瀆は赦されません。また、人の子に逆らうことばを口にする者でも、赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されません。」（マタイ 12:31-32）

ここで、イエス様が言わんとしていることは、どんな罪でも赦すということです。

聖霊に逆らう罪とは、一人一人の心に語り続けておられる聖霊様の呼びかけを無視して、神様のもとに行かないことです。神様のもとに行かなければ、いやされることはありません。しかし、神様のところに行けば、どんな罪も赦されます。それは、本来あなたは良き者だからです。

罪とは、愛されていない不安と肉体の死に対する不安という死の恐怖から生まれたものであり、この不安を取り除くことができるのは、イエス様だけです。イエス・キリストこそ、十字架の愛と永遠のいのちを与え、あなたをいやすことができるただ一人の方なのです。

実際イエス様は、誰の罪を裁いたのでしょうか。姦淫の現場にいた女性は裁かれたのでしょうか。イエス様を裏切った弟子達は裁かれたのでしょうか。イエス様を殺そうとしていたパウロは裁かれたのでしょうか。誰も裁かれていません。誰もがそのまま赦されています。イエス様は、今まさに自分を十字架にかけて殺そうとしている兵士たちに対しても、次のように言っておられます。

「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23:34)

兵士達は、当然自分がしていることがわかっていました。それなのに、イエス様が「彼らは何をしているのかわかっていない」と言っておられるのは、それが死の恐怖ゆえに行っていることだからです。

このように、イエス様は、一貫して、罪を裁くことはなさいません。むしろ、常に「赦す」と言っておられます。

イエス様は、人は良き者であり、人が罪を犯してしまうのは、神の愛が見えない不安といつ肉体が滅びるかもしれない恐怖のせいだとわかっておられました。だからこそ、罪を病気と呼び、私がいやすと言っておられるのです。

実は、聖書全体を通して、神様は一度も「罪を悔い改めよ」と言っておられません。日本語で「悔い改め」というと、後悔し反省するという意味です。しかし、悔い改めと訳されている言葉は、旧約聖書では「シューヴ」、新約聖書では「メタノエオー」です。これは、両方とも「方向を変える」という意味であり、後悔して反省するという意味はありません。

つまり、罪によって神とのつながりを失ってしまった人間に、神様は後悔や反省を促してはならず、ただ神に方向を変えていやされなさいと語っておられるのです。

罪は病気ですから、反省したり後悔したりすることで、治るものではありません。病のつらさ、苦しさを、医者であるイエス・キリストに告白して、いやされることが必要なのです。

(※2017 年に出版された新改訳 2017 では、「悔い改め」という訳はなくなり、「立ち返る」という訳になっています。)

■さばく必要はない

今日のカウンセリングを大きく分けると、精神分析、行動療法、人間の実存に基づく方法の3つのアプローチがあり、日本での主流は、人間の実存に基づくロジャーズのカウンセリングです。ロジャーズは、人間の性質・本能は良きものであるから、何も指導する必要はなく、ただ受容してあげれば苦しみは解決すると思えました。ロジャーズのこの考え方は、テイリッヒという神学者の影響を受けています。

このやり方は、実に聖書的です。聖書は、さばいたり、悔い改めを迫ったりするのではなく、ただ受容します。イエス・キリストは、苦しむ人と一緒に食事をし、共に苦しみ、その気持ちを受容し、あなたを愛していると伝えました。そうして人々の罪はいやされて回復していったのです。

多くの人は、罪を悔い改めなければならないという間違った考えを持っています。そうではなく、人は良き者だから、つらさを受容すれば、良くなるのです。

自分をダメな者だと思い込んでいる人間達に、人は良き者だと気づかせるために、イエス・キリストはこの世に来られました。あなたは私が良き者として造った者であって、あなたの

ためならいのちさえ惜しまないと主は言われます。それが十字架の意味です。

イエス様が十字架を通して私達に伝えたかったことは、次の3つのことです。

1. 自分を裁かなくてよい

自分のことも、他人のことも裁く必要はありません。罪は病気であり、裁くものではなく、いやされるべきものだからです。神様は、「私はあなたをあわれむ」と言って、病気をいやしてくださいます。私達の病気は、神の愛が見えないことへの不安と、肉体の死に対する恐怖です。イエス・キリストは、その不安を取り除くために十字架に架かって愛を示し、死に対する恐怖を取り除くために、復活して永遠のいのちを見せてくださいました。こうして、私達を死の恐怖の奴隷から解放してくださるのです。イエス・キリストの十字架は、私達をいやすための十字架です。

病人である私達は、裁き合うのではなく、互いにいたわり合い、いやしを求めましょう。自分を裁いたり、相手を責めたりするのは、愚かなことです。あなたは初めから良き者なのです。

2. 人と自分を比べなくてよい

人と自分を比べるのは、自分をダメな者だと思っているからです。ダメな者だと思っているから、自分の優れている点を比較して確認しようとしたり、人に憧れて落ち込んだりするのは、比較によって、嫉妬や競争が生まれ、争いが起こり、苦しみが生まれます。この世の苦しきは、自分はダメなものだと思ふところから始まっているのです。罪というものは、自分をダメなものだと思えば思うほど、雪だるま式に大きくなって苦しむ仕組みになっているのです。

あなたは良き者ですから、人と比べる必要はありません。本当に自分は良き者なのだと思うと、人と比べなくなります。一人一人の違いは、キリストのからだとして必要なパーツとして造られたものですから、思い違いをしてはいけません。

3. あなたは良き者だから、心配しなくても良くなる

多くの人が学校で習った進化論は、「ダメな者が良くなっていく」という理論です。しかし、神様は、私がそのように造ったのだから、あなたは初めから良き者だと言われます。どんなに悪い行いをしたとしても、「あなたは良き者だから、必ず良くなる。心配しないで、私にゆだねなさい。」と神様は言われます。それなのに私達は、自分で自分をダメな者だと思っているので、心配ばかりしてしまうのです。

人は皆良き者です。あなたは自分が良き者であること知って生きているでしょうか。私達には希望があって、必ず良くなるのです。私達は、ダメな者だから罪を犯すわけではなく、死の恐怖の奴隷になっているに過ぎません。ですからイエス・キリストは、十字架に架かって、愛と復活を示してくださいました。これが、聖書が教える救いであり、救いとはいやすという意味です。人は皆良き者であり、イエス・キリストは、私達をいやすために来られた

——このことを理解するなら、自分を裁かなくなり、人と比べることがばかばかしいと思えるようになり、心配しなくても良いことがわかるようになります。

あなたは良き者です。イエス様は、それを知らせるためにこの世に来られたのだということを忘れないでください。